

職人の技

シリーズ④〇〈ピアノ調律師〉

伊藤 正敏 さん

伊藤さんのプロフィールには「私は職人です!!」「職人腕に自信ある」「職人とことん仕事する」「職人ピアノ愛してる」「そして…職人うそつかない!!」という文字が躍る。一流の調律師が持つ職人へのこだわりを解くキーワードは師匠との日々、そしてドイツにあった。

調律というと、「コンサート前のピアノや家庭のピアノの音をチューニングする人」というイメージだが、伊藤さんの調律師としての仕事はこれにとどまらない。

「僕の中では修理・修復までするのが調律師のイメージ」
修理・修復は大工仕事のよ
うな腕力や体力も必要。ピ
アノの製造・構造の理解も必須。
ピアノそのものが好きな伊藤さ

んは、繊細なタッチや音に対す

る集中力と芸術性を愛すること
と同様にこの仕事に思いを注い
でいる。影響は、同じように
ピアノを愛した師匠から受けた。

18歳、ゼロから調律師のなん
たるかを教えてくれた師匠は、
恩人であり、目標とする職
人の一つの姿だった。

「よく怒られましたし、う
るさいことは言うけれど、面
倒見がよい師匠でした。今も
使われている調律師学校向
けの教科書を書くぐらいの偉
い人で、イギリスへの留学経
験がある。高齢でしたけれど、
インテリジェンスが高いんで
よ。『とにかく勉強しろ』が

口癖でした」

調律師を目指す人は学校へ、
という流れが主流の時代の中
で、当時でも珍しくなっていた
徒弟関係の中、もともと楽器
が好きだった青年は、師匠の
背中を見ながらどんどんピ
アノの世界に没頭していく。印
象に残っている言葉があった。

「この世界で生き残るには、
かばん一つで海外へ修業に出
てこい。世界のピアノを見てこ
い。それが、師匠から離れて
就職しても頭にこびりついてい
て…」

その後、ピアノメーカーに就
職し、さらにやりがいをも
て地域では名の知れた楽器店

に転職。その日々は、むしろ
人生の歩みとして順調といえ
た。家庭を巡回しての調律と
併せて営業も経験。十分な
報酬も得た。

「このままでも良いかなと思
う反面、師匠の下でやってき
た緊張感や、やりがいを忘れ
られない自分がいました」

師匠の言葉が背中を押し
た。27歳、伊藤さんは、かば
ん一つで、ピアノの本場、ドイ
ツに渡る。しかし、日本人を
受け入れる余地はほとんどな
い。ピアノの世界、本場であ
るといふ自負を持つドイツ人。

一流のピアノメーカー、ショッ
プはドイツ人でさえ狭き門、あ
こがれの舞台だ。

調律師としてのプロフェッショ
ナルと認められるために、伊
藤さんは、難関中の難関とも
いえる『ピアノマイスター(ク



文=岩瀬 大二
text: Daji Iwase

写真=岡本 成生
photo: Masao Okamoto

ラヴィーア・バウマイスター)』
の資格に挑戦する。ピアノ調
律、製造の実務経験はもちろ
ん、専門学校に通い、国家試
験などさまざまな課題をクリ
アしてたどり着く栄誉であり、
世界をその腕で渡り歩ける『パ
スポート』だ。

「厳しかったのはピアノその
ものよりもむしろそのほかのこ
と。経営にかかわる法律、簿
記、労働法規、そして人を育
てるための教育学など、幅広
い課題がありました」

職人は腕だけではない。知
識を持ち、その業種を商売

マイスターとしての誇り、
世代を超えて



として確立し、伝承していく。芸術性、表現力と、親方、棟梁としての責任のバランス。それこそが職人の姿。伊藤さんが理想とする調律師の姿も同様だ。体力と繊細、汗と冷静、修理・修復と整調・調律、整音。相反する要素に見えて、

それは背中合わせではない。「師匠には『勉強しろ』と厳しく言われ続け、うるさく感じたこともありましたが、今思うと自分も若いスタツプに同じように伝えているんですよ」

職人としてのあるべき姿が伝承されている。マイスターとしてのDNAも脈々と流れている。今度はこのDNAを次代へ。「先日、うちの若いスタッフを、かばん一つで海外に出しました。その経験をどう生かしていくのか。楽しみですよ」



PROFILE

いとう・まさとし
東京都出身。高校卒業後、ピアノ調律界の第一人者だった竹内友三郎氏（故人）に師事。修業の後、ピアノ製造会社、有名楽器店勤務を経て渡独。現地でピアノ製造・販売実務を経験しながら「ピアノマイスター（クラヴァー・パウマイスター）」取得。帰国後、神奈川県横浜市に、調律・修復・販売を行う有限会社伊藤ピアノ工房を設立。社団法人ピアノ調律師協会会員。